

1 戦後の住宅欠乏時代から現在に至るまで、住宅は量的にも質的にも大きな変化をとげてきたが 中でも台所ほど形の上でも意味の上でも変化してきたものはないといえる。台所が何をやる所であるかという内容は時代の中で変化し続け 今日もなお変わりつつある。台所は我々の生活そのものの集約であり それを把握する事は生活の未来像を明らかにする上でも意味があるといえる。そこで本研究では住宅の平面図から台所空間がどんな部屋とつながりを持ってきたかを分析することによって、住空間において台所のもつ意味がどのように変化してきたかを明らかにしたい。

2 住宅平面図はS. 25～60までの新住宅誌に掲載されているものから各年60件を目標に計1960件抽出し、平面図 写真 説明文等から他室との結びつきを調べ得点で表わした。また食事室や居間との関係から台所の独立度を独立型 (K, KW1, KW2, Kd0, K0, Kd1, Kd2, K1, K2) セミオープン型 (K3, K4, K4, K5, K0d) DK型 (DK, DK) LDK型に分類した。

3 他室とのつながりの得点をもとに台所の作業性・団らん性を求めた。S. 25～27は作業・閉鎖型の独立台所であったが、S. 33頃からDKが多くなり 家庭電化機器の普及につれて浴室炎口や土間といった作業室とのつながりが少くなり 開放・団らん傾向がでてきた。S. 38頃にはLDKワンルームが全盛を示し そこでは台所は単なる作業場ではなく団らん空間としての居室として扱われている。S. 40～42には開放・団らん性はピークを示し 住宅の質の向上と共に設備面を中心としたDKの質の充実がみられる。S. 43を過ぎるとDKは減りはじめS. 47頃から再び独立台所の割合が多くなり 閉鎖傾向があらわれている。団らん、作業室に得点の減少がみられる。S. 52～54ではさらに閉鎖型が増加し 台所と食事室を空間的に分離しようとしている。S. 55頃になると独立台所でありながら団らん性をも考慮したセミオープン型のものが増えている。いわゆるシステムキッチンに類するものである。このタイプでは空間的に食事室を台所にまきこまないで 台所自身は機能性を保ち かつ団らん空間の食事室や居間とのつながりを考えている。こうした台所では作業室を台所空間と切り離す傾向にあり 台所の閉鎖性はますます強くなる方向性をみせている。